

様式(9)

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 保 第 6 号	氏 名	中木 里実
審査委員	主 査 友竹 正人 副 査 谷岡 哲也 副 査 岩佐 幸恵		

題 目 Relationship between identity and attitude toward death in Japanese senior citizens

(高齢者の自我の状態と死への態度との関連について)

著 者 Satomi Nakagi, Toshiko Tada

2014年2月発行 JMI(The Journal of Medical Investigation), Vol.61,
No.1, 2 に掲載予定

要 旨 高齢者が生涯発達の最終段階である「自我の統合」を達成し、より健康的に終末を迎えることは高齢社会における重要な課題であることを踏まえ、本研究は、高齢者を対象に、自我の発達段階と自分自身の死を迎える態度との関連を明らかにすることを目的として、徳島大学病院臨床研究倫理審査委員会の承認(第1468号)を得て実施された。

シルバー大学生を対象として、質問紙調査と面接調査が行われた。質問紙調査の内容は、エリクソン心理社会目録検査(EPSI)と死への態度尺度(DAP-R)であった。さらに回答者の中から協力の意思を示した対象者に半構造化面接を行った。誕生から現在に至るまでの4つの発達段階に分かれるインタビューガイドを作成して、それを用いて面接を実施した。質問紙調査の回収率は85.4%(427人)であり、面接調査には10人が参加した。量的データと質的データを基に分析が行われた。

その結果、EPSI下位因子とDAP-R下位因子の相関は、「統合性」と「死の恐怖」及び「死の回避」の間にやや強い負の相関、「統合性」と「逃避型受容」との間に弱い負の相関があった。面接によるこれまでの人生の振り返りでは、【周りの人との信頼関係】、【努力に対する自負】、【社会に役立ちたい】、【あるがまま】の4つのカテゴリーが抽出された。

これらの結果から、自分のこれまでの生き方を受け入れて、うまくいかなかったことも含めて、この人生でよかったのだと納得することが死の恐怖を低くすることが明らかにされた。幼い頃から形成された【周りの人との信頼関係】を基盤として、【努力に対する自負】や【社会に役立ちたい】という態度が養われていったことが示され、これまでの人生を振り返った時に、いろいろあったがすべてをよしとして【あるがまま】に受け入れることが、死に対しても【あるがまま】に臨める態度につながっていることが示唆された。統合性が死を避けて受け入れる態度形成につながっていることが明らかにされた。

以上の内容は、高齢者の自我状態と死への態度との関連を明らかにし、高齢者が健康な人生を全うすることを支援するための基礎的資料になるものであり、有意義な内容である。その社会的意義は大きく、博士の学位授与に値すると判定した。